

謎の鼻―神立平遺跡出土の鼻形土製品―



右側面

正面

左側面

▲神立平遺跡第3号住居跡出土 鼻形土製品(原寸大)

上高津貝塚ふるさと歴史の広場の収蔵庫には、これまで市内で行われた発掘調査によって出土した、たくさんのお宝が収められています。これらの資料の中からは、あっと驚く資料が再発見されることがあります。今回紹介する資料は、神立平遺跡(神立町)の再検討によって発見された、縄文時代の鼻形土製品です。

現存する鼻形土製品の長さは4・7センチメートル程度、粘土の塊を成型し、土器と同じように焼いて仕上げられています。横から見ると分かるように、鼻のあるほう(表)が凸の、弧を描いた形状をしています。一目で「鼻」と分かるくらい写実的につくりで、鼻の孔にあたる部分は棒で丸い凹みがつけられています。鼻以外はほとんどが欠けていますが、鼻の付け根の両側と、鼻の下、言い換えれば「目」と「口」に相当する部分は、後で欠けてしまったのではなく、最初から穴が開けられています。いったいこれは何なのでしょう。

縄文時代に顔を表現した遺物としては、まず土偶が挙げられます。この時期の土偶は関東地方に分布するみみずく土偶か、東北地方に分布する遮光器土偶が考えられます。しかし、みみずく土偶にしては表現が写実的すぎますし、本来あるべき後頭部もありません。遮光器土偶の場合、中が空洞のつくりなので、形状としてはあり得るのですが、普通は目や口の部分を開けません。

土偶以外に顔が表現される遺物としては、人面付土器か土製仮面が考えられます。人面付土器は文字

通り、深鉢形土器の口縁部や、注口土器の器面に顔が表現されるものです。また、土製仮面は、粘土でつくり、土器と同じように焼いて仕上げた仮面です。紐をかける穴が開いており、祭祀の際に額や顔に装着したと考えられています。土偶に比べて写実的な造形が多く、東北地方にみられる「鼻曲がり土面」など、変わった表情のものが多くいわれています。

神立平遺跡の鼻形土製品が、人面付土器なのか土製仮面なのか、はたまた別の遺物の破片なのかは、残念ながら分かりません。もしかしらば、縄文時代の土浦市には仮面を身に着けた呪術師(シャーマン)がいたのかもしれない。

今回紹介した鼻形土製品は、考古資料館にて5月12日から6月末日まで展示しています。

☎上高津貝塚ふるさと歴史の広場
(0826・7111)



▲仮面だった場合の想像図